

## フェミニズムとエコロジー

### —性差と母性をどう位置づけるか—

#### はじめに：四つのキーワードの定義と生殖医療現場

まず女性問題と生殖技術を考える上で、次の四つのキーワードを私なりに定義しておきます。

「フェミニズム」とは「性差別をなくすための考え方とその実践」と言えると思います。

次に「エコロジー」とは「自然と人間の関係を根源的に問いなおす新たな思想枠組」と私は考えています。日本では「エコロジー」がたんに自然保護としかとらえられていませんが、フランスやドイツでは環境保全という意味だけではなく、自然と人間の関係を考える中で新しく問われる社会の価値観、人間の生き方の根源的方向性を考え直す思考枠組と考えられています。

第三番目のキーワード「性差」とは男女間の性的な差異ですが、これをつきつめると生殖機能の違いになります。しかしこれまで通用してきた性差のイメージがたんに機能の違いだけでなく、そうした生物学的要因が男女の能力、気質、表現形態まで規制すると考えられてきたことが問題だと思っています。

最後のキーワードは「母性」ですが、これは十分注意した上で使わなければいけない概念です。なぜならば、今では性差を差別の根拠にすることはかなりなくなって来ていますが、母性を理由にソフトな女性差別が行なわれている現象が見られるからです。そしてまたその反動として母性の全面否定が現われて、今は母性イメージが大変混乱している時代ではないかと思っています。

そこで私は「母性」を次の三つに分けて考えたいと思います。第一番目は「母性功能」、つまり生殖機能で、これは人類に共通の生物学的条件の一つです。第二に「母親役割」があります。これには授乳だけでなく、広く子どもの世話をする役割まで含まれますが、これは生物学的条件だけでなく社会的条件によって大きく規定されます。というのは、母親以外の人間が子どもの世話をする社会はたくさんある。あるいはあったからです。むしろ今のように、産んだ母親だけが子どもと一対一で密室の中で育児をする状況は、近代になってから、しかもごく最近現われたまったく新しい現象なのです。

第三番目のものとして、「母性」には「象徴的母性イメージ」があります。これは人々が母性ということばから思い浮べるイメージと言ってもよいでしょう。日本では「母性」には「いつくしみ」「寛大さ」「包み込む暖かさ」といったイメージが持たれ、それが過大に評価されていますが、第三世界の中には母が父よりも激しくダイナミックであるというイメージを持つ人たちの文化もあります。つまり、これも絶対的なものではないのです。

日本では以上の三つが「母性」という漠然としたイメージに含まれています。ですから子殺しや、母子心中などが起ると、「母性の喪失」といわれて、女の自己主張が強くなったせい、あるいはウーマンリブに原因があるかのように言われます。しかし母親役割をうまく行うには単に女という性に生まただけではなく、社会的学習が必要であり、社会全体がそれをサポートするシステムを持たなければならないのです。そういう背景が整ってはじめて、この三つの要素がそれぞれの社会的・文化的条件下で、一人の人間の中で内面的に統合され一人一人の identity の基盤の一つとなることができるのです。それが現代では、分断されゆがめられていく傾向にあるところに、私は一つの危機を感じているわけです。

このように、フェミニズム、エコロジー、母性、性差が現代の社会の中で歪められ、問題を孕んでいるのですが、これら四つがからまり合って、生々しい人間ドラマとして出てきたのが新しい生殖医療の現場ではないでしょうか。で

すから私は、この問題を考える中で、四つの関係とそのあるべき将来の方向も見えてくるのではないかと暗中模索してきました。

まず具体的な例をあげて話をすすめて行きたいと思います。それは今年1987年アメリカで起った「ベビー M 事件」です。これは妻の方に障害のある不妊の学者夫婦が子どもを得るために、夫の精液による人工授精で赤ちゃんを産んでもらった代理母との間におこった事件です。代理母の女性が出産後愛着を感じて赤ん坊の引き渡しを拒んで逃亡し、それを依頼者側が私立探偵をやとって探し出し奪い返すという事件で、大変大きな反響を呼びました。学者夫婦（夫は精子提供者）と産んだ母親（代理母）のどちらで子どもが育てられる方が幸せかということで、全米で議論が沸騰し、注目されたものですが、ニュージャージー州の裁判所は収入、学歴、社会的地位を考慮して学者夫婦に親権を認めました。

この事件には三つの問題点があります。まず、代理母幹旋業という、人間の身体を商品化する商売が裁判所で正式に認められてしまったという恐ろしさです。第二の点は、子どもを持つための資格が社会的地位や収入の多寡や学歴などで決められる、これは社会による親の選別です。第三に、これが最も重要な点かもしれませんが、代理母によって産まれた子どもが成長してから自分の出生をどう受けとめるか、アイデンティティにどう影響するかということです。

この「ベビー M 事件」のような代理母の例はまだ日本では起きていませんが、夫以外の提供者による精子の人工授精は40年近く前から実施されていますし、体外授精（いわゆる試験管ベビー）も1983年から行なわれています。最近ではまた「男女産み分け」が可能になり、マスコミなどにも大きくとりあげられました。こうした技術に高度な遺伝子工学などが結びつくと、将来にはどんなことが起るのか想像もつきません。すでに畜産の世界では、異種動物間の交配や借り腹による品種改良など、かつては考えられなかったことが実用化されているからです。そして人間の場合は、こうしたことがすべて「不妊女性への福音」ということを口実にして進められてゆくのです。

先日私はN H Kの女性不妊の特集をした番組に出演しました。実は私も産めなかった女性なのですが、この番組に出てきた不妊の女たちを見て、「子どもがないことほど不幸なことはない」という思いつめた気持の迫力に圧倒されました。そして不妊の女性がそれほどまで追いつめられるということは社会問題だと痛感しました。

つまり、現代の女性は昔に比べて一見解放されているように見えますが、社会の価値観が変わり家庭の機能が変わったにもかかわらず、子産み・子育て以外の自己実現の道はまだそれほど開かれていない。むしろ疎外感や孤独感を、子どもを産むことで補償したいという気持ちが強まっているのではないかということです。その辺に、生殖技術の進歩と女性問題との複雑なからまりがあるように見えます。

それではまず、女性問題のキーワードである性差と母性について考えてみたいと思います。

### I、性差と母性とはどのような社会的評価を受けてきたか。

性差を口実にすると差別になりますが、母性を出すことによって差別がソフトになります。女には男には出来ない崇高な使命があるからというのですが、この母性が現在では差別のブラックボックスになっています。

母性イメージは一方で賞揚されながら、現実では卑しめられてきたというのが事実ではないでしょうか。母性機能に見合った尊敬が払われていない例として、生理が不浄視され、女性は労働者としてダメージ視されて来たことがあります。母性機能と母性イメージの間には大きなギャップがあるようです。

また母親役割は個人のレベルでは重要視されていますが、それに従事する女性には社会的バックアップがなされていません。それどころか、母性機能を内蔵した女性は将来それを行使する恐れがあるということで、労働者として劣った存在とされ、雇用条件が厳しくなっています。ですから、女性個人からみると母性は矛盾の最たるものになってしまいます。といいますのは、「良き母親」

であろうすれば社会人としてはマイナスに評価され、「良き社会人」であろうとすれば母親としてはマイナスに評価されるからです。共働きの母親は、どんなに頑張っているでも「子どもを犠牲にしてまで無理して働かなくてもいいのに」と言われます。これは女性にとってまさに二律背反ではないでしょうか。

## Ⅱ、第二波以後のフェミニズムの対応はどうか？

### 公民権運動から『女』解放への流れの中で—

19世紀以来のフェミニズムは参政権運動に集約され、今世紀半ばまで続いてきました。黒人運動のネーミングを借りると、私はこれは女性解放運動における一種の公民権運動だったと思います。というのは、女性も人間として男性並みの公民権を得たい、与えるべきだという事を要求した運動だったからです。この場合、女性の生物学的属性は括弧に入れて、女も人間だということにポイントが置かれていました。そして今世紀半ばまでにはほとんどの国で公民権が女性に与えられ、本来はこれで女性問題も解決するはずでした。しかし1960年代後半になってもまだ解決されていないことがわかってきました。

1960年代後半にアメリカではじまったいわゆるウーマン・リブは、本来豊かで、高学歴、高収入と、幸福を絵に書いたような郊外の中産階級の主婦たちから起ったものでした。「頭のいい女はもてない」と、学業でも仕事でも控え目な「女らしさ」を演じ、憧れの主婦になってみた結果、彼女たちは子育て後の長い人生をどう過してよいかわからなくなったのです。いわば彼女たちは、自分を家庭というオリに囲いこまれた囚人のように感じたのです。こうした彼女たちの声にならない不満や不安、内にこもっていたエネルギーが噴きだしてきたのがフェミニズムの第二波であるウーマン・リブだったのです。

このように、第一波が「男並み」を目標にした政治と教育へのアクセス権を求める人権運動であったのに対し、第二波では、当り前の女たちが「女」という現実をかかえたまま、どうしたら自己実現が可能かというところに焦点が当てられたのだと思います。

そこで最初にぶつかったのが、性差神話の壁であり結婚という制度だったわけです。この両方に流れている「性」というテーマがこの時代ほど論じられたことはなかったと言えます。そして文化人類学や性科学の進歩とあいまって、男女間の性によるちがいは、生物学的な根拠よりもはるかに多く社会的・文化的要因によって形成されるということが証明されたのです。つまりこれまで信じられていた男女間の能力差や気質のちがいなどの多くは、後天的に作られたものであるか、あるいは偏見による場合が多く、個人差の方がはるかに大きいということです。

このように性差神話はほとんど解体されますが、最後に生殖機能の違いは残ります。ここで、フェミニズムの中における「母性」のとらえ方が二つに分かれます。一つは母性機能受容派で、欧米ではジャーメン・グリアなどに代表され、日本のウーマン・リブではこれが主流です。つまり女性が妊娠・出産機能を持つ人間として生きやすい社会を考えることは、また社会的弱者（老人、障害者、子どもなど）が共に生きていく上でプラスになる社会をつくり出す視座になるのではないかと。こういった意味で、性差神話の解体と同時に、これまでの男中心社会への疑問が出てきたのが1970年代の特長です。

もう一つが性差否定派＝母性機能拒否派で、これはアメリカのシュラミス・ファイアーストーンに代表されるいわゆるラジカル・フェミニストです。彼女たちは生殖機能の女性の身体からの外化を提唱し、生殖技術の進歩を女性解放の第一の戦略として考えました。そしてファイアーストーンが17年前『性の弁証法』のなかで書いたことは、現在技術的にはほとんど可能になっています。

今ではこれをオプティミスティックに支持するフェミニストはいないかもしれませんが。しかしファイアーストーンのような、母性機能を女のデメリットとする考え方は、ボーヴォワールにも見られたものですし、それが『プラス・ラブ』の著者であるE・バダンテール（フランスの大学で哲学を講じている）に現在受けつがれています。キャリアも子どももと考えている女性に対して社会がどのようなケアをするかが解決されなければ、ある意味で、生殖技術を支

持する女たちが出てきても当然かもしれません。

### Ⅲ、人工生殖を支持するさまざまなイデオロギー

#### 1) 反フェミニズム的な発想

不妊の女性が追いつめられる背景に家意識があります。もともと人間には一代限りで消えていく不安が普遍的にあります、これが血統をつなぎ、家名や財産を相続させ、墓を守らせるために子がなくてはならないという家意識によってさらに補強されるのです。ここには、技術は超モダンですがそれを支えるイデオロギーは前近代的という逆説があります。女性の自己実現が子どもを産むこと以外に見出しにくい社会がある限り、不妊の女性が追いつめられる気持ちもなくなりません。昔ならあきらめるか養子ですませるところですが、今ではなまじ人工生殖で産まれた子の例を見せつけられると、際限もなく血縁の子に対する執着が加重されて、これは非常に残酷です。(全身麻酔による手術を要する体外授精での出産成功率は現在2.5%といわれ、97%以上が数回の手術でも不成功に終わっている。)

#### 2) ラディカル・フェミニズムの流れとして

それではフェミニズムを押し進めればこの問題が解決するかというと、そうは言いきれないところにこの問題の難かしさがあります。

それと言いますのも、先にふれた母性神話の反動として、ファイアーストーンの発想があるからです。しかもデカルト以来の心身二元論によって、肉体と精神を切り離し、肉体は精神より劣ったものだから道具化してもよいという価値観から、人工生殖を支持するイデオロギーが導かれやすいのです。

70年代初め、性と生殖を切り離して考え、性をコミュニケーションとして認めるべきだと主張され、私もこの意見を支持してきました。これは、生殖神話への偽善的モラルからトータルな性の意味をとり戻したいということだったと思うのです。しかし、性と生殖を切り離す考え方が人工生殖のなかでうまく利用される恐れがあり、ここにフェミニズムの問題が出てきているのではないで

しょうか。私は母性神話は解体するべきだと思いますが、母性機能まで否定されるべきではないという立場です。これの理論化は今後の課題になると思います。

### 3) 清浄栽培指向として

これは特に日本で起りやすいことですが、スーパーマーケットに行くと、形の整った野菜が画一的で、きれいにパックされて売られています。このような国はあまり他に見られないのです。形の悪い野菜、虫のくった野菜は価値が劣るという清浄栽培指向の行き届いた社会では、人工生殖によって、遺伝子チェックをし、科学的に条件を整えて優秀な子を産むという発想が歓迎される土壤があるように思います。画一化指向のなかで、「みんなと同じいい赤ちゃんを産みましょう」といったスローガンが容易に入り込みます。これは優生思想と同じだと言っていいと思います。

### 4) 優生思想の技術的基盤として

優生思想というと、ナチスドイツの恐ろしい話を思い出す方がいると思います。ドイツ民族の優秀性を保持するためには、他人種の血が入るのはよくないというヒットラーの考え方がアウシュビッツのような収容所を生みました。ナチスの例はあまりにも極端なのでよく見えますが、今日の日本にもその名残はあります。健康で一定の知能指数を持つ人間だけがいい人間だという考え方が、つまり優生思想なのです。

このように、優生思想はなくなっておらず、社会的リスクのある障害児を減らし、国民の「質的水準の向上」を国家は常に望んでいます。ですから、優生思想の技術的基盤として、生殖技術が簡単に社会のなかに入り込む危険性は非常にあると思います。今では、遺伝子工学の進歩によって、受精卵の段階で異常がわかり、遺伝子をいじったり、とりかえたりできます。状況によっては人間の品種改良が可能になってきます。

生殖ファシズムともいうべき人間の均質化が行われると、種として破滅する恐れが出てきます。自然界の特色は多様であることで、人間の顔が一人一人違



ように遺伝子の組み合わせは何億とあります。そのことによって、人間は様々な自然条件に適応しながら生き延びることが出来たといえます。ですから、人工生殖による品種改良と画一化によって人類が滅亡するのではないかという危惧を持つ動物学者もいます。

#### IV、エコロジー思想の明と暗

エコロジーが目に見える自然と人間の間を関係を考え直すということであれば、私は人間の身体も一つの内的自然であって、これを破壊する人工生殖は許されるべきではないと思っています。そこでエコロジーがこの危機の歯止めになるのではないかと思うのですが、このエコロジーにも危険性があります。

科学技術の力で自然を人間の思い通りに利用してきた産業社会の自然観への反省としてエコロジカルな発想は有効です。というよりも、核兵器や原子力発電所による放射能汚染の脅威や、公害による自然破壊がここまで進んでしまった今日、エコロジカルな発想なしにはもはや人類の生存は不可能であると言うべきでしょう。しかし、生命の尊厳がスローガン化されて、種の保存が強調されすぎると、女性は生命の再生産だけに専念すべきだという考えが出てきます。これは働く母親をはじめ、子産み・子育て以外に自己実現を求める女性に対する重大なプレッシャーとなります。

本来自分の人生は自分で決定するという自己決定権が人権の基礎ですから、産むか産まないかの自己決定が出来なくなるのは人権侵害にほかなりません。女性は母親になる可能性としての「産む性」を持った人間ですが、それはけっして「産むべき性」ではないのです。時々、「人工生殖と同じように避妊や中絶も反自然だから、よくないのでは?」と言われる方がいます。性教育や母親役割への社会的サポートなど、中絶をしなくてすむ方向をつくり出していく必要はもちろありますが、たまたま望まない妊娠をした場合、それを継続するかどうかは女性が自分で決定すべきことで、それに対してたとえエコロジカルな立場からであろうとも、社会が介入したり、まして法をもって罰することはけっ

してすべきではないと私は考えています。

しかも人類が何万年も生き延びてきた背景には、もちろん繁殖も重要でしたが、環境のなかで与えられた食糧に限りがある時、避妊や中絶は人間が生きるのびるための大切な知恵であったわけです。それはプリミティブな形の生殖技術であって、今私が問題にしている生殖技術は一線を越えてしまったもの、生殖工学とよぶべきものであって、いわば生殖の生態系を破壊するものだと思います。

### おわりに

エコロジーにもフェミニズムにも危険性はあるのですが、これをどう折り合わせていくかが、戦争や公害のない平和な世界を構想するための一つの大きなファクターになると思います。そして様々な条件を持った人間（女と男、老人と子ども、障害者と健常者など）同士が、さらに動物と人間が、この地球という限られた星のなかで互いに差別することなくどう生きのびて行けるのか、その具体的な実践方法をこれからみなさんと共に考えていきたいと思います。また、どうやって人権と生命の尊厳を守りながら、それを実現していけるかが、私たちににとって大きな課題だと思っています。

## Summary

# Sex Differences and Motherhood in Feminism

Lecture by Yayoi Aoki

The first wave of women's liberation movement which has been going on since the 19th century is a human right movement the aim of which is to gain the same rights that men have. In contrast with the first wave, the goal of the second one which began in the 1960's is self-realization not only for elite women but for ordinary women, on the daily level. Then, the myth of sex differences has become one of the obstacles for women's liberation.

In this situation, the studies of sex differences were carried out in the 70's, which incorporated the achievements done in the fields of sexology and anthropology respectively. And we've come to understand that sex differences are made much more through the social and cultural factors rather than through biological differences. However, there still remains a difference of reproductive function which only women innately have.

Then around the concept of motherhood two different viewpoints have grown in the feminism. The first is represented by Germaine Greer who claims to accept the maternal function for women, and is prevailing in the Japanese movement for women's liberation. This viewpoint insists that the acceptance of such a sex as reproduction of life illuminates the distortion of the present male-oriented society, and will make itself a force to change the society.

The second is represented by Shulamith Firestone who denies the

maternal function in woman's body and sex differences themselves. She insists that since women are discriminated while they innately have maternal function, the artificial reproduction should be developed to alienate it out of woman's body. This notion is also found in Simone de Beauvoir's works as a germinating thought, and now advocated by Elisabeth Badinter.

Since the first baby was born in vitro fertilization in England in 1983, reproductive technologies have rapidly grown, the improvement of breeding of human beings becomes possible which is related to genetic engineering. Furthermore, technologies related with the "test-tube baby" are used in Japan by the old ideology to keep the *iye* (traditional institution of family) and the patriarchal breeding.

Facing these threatening situations, we have to find the alternative way of thinking which integrates both feminism and ecology, and does not endanger both human right and dignity of life.